

---

# 格闘少女かつみ マギカ

剣竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

格闘少女かつみ マギカ

### 【NNコード】

N5697W

### 【作者名】

剣竜

### 【あらすじ】

「魔法なんて無くても魔女は倒せる」

「奇跡だつて起

こじてやるよ」

そう言い、魔女と戦う少女。だが彼女は『魔法少女』では無い、ただの『少女』だった！？様々な知恵と戦略、多くの人の手を借りながら戦う少女。魔法の力を手に入れた友と共に…

## プロローグ（前書き）

『電腦戦記まどか マギカ 救世のティマー達』の番外編を書いています  
ますが、なかなかうまくいきません…  
これさえうまくいけばあとは本編もスムーズに進むのですが…

## プロローグ

午前七時…

街は徐々に活動を始め、多くの人々が通学や出勤のために移動を開始する時間帯だ。

ごくあり触れた風景。

この首都から離れた都市である見瀧原市でもその光景は変わらない。

はずだが…

「ギヤアアアアアア…！…！」

その常識はすぐに覆されたことになつた。

閑静なる朝の住宅街に響き渡る悲鳴。

まるで空を割くかのような甲高い断末魔が辺りにこだまする。

この声の主は一体誰なのか…

その後も狂氣の叫び声が辺りに響き渡る。

「た、助けてくれえ！」

「そんな、うわあ！」

どうやら何かに襲われているようだ。

人を殴る鈍い音や地面に叩きつけられる乾いた音が連続して鳴り響く。

しかも、襲われているのは集団の男のようだ。

無限に続くかとも思われる連鎖。

何十人の男たちが叫び声をあげ、倒れていく。

だが、数分してその声は完全に聞こえなくなつた。

全員やられてしまつたのか…

いや、一人だけ残つていた。

「ば、馬鹿な。寝込みを50人の不良<sup>ヤンキー</sup>で襲つたのに…、数分で全滅

…」

その場に立ち尽くす男。

どうやら、先ほどの惨劇はこの男の指示の元に『ある者』を襲つたことで起きたことらしい。

50人がかりでも敗北するほどの相手とはいつたい誰なのか…

「またアンタかよ前田サン、いい加減しつこいつすねえ…」

前田と呼ばれるリーダー格の男、そしてそれと対峙する襲われた張

本人。

話している間、ずっと髪をいじりつており、余裕たっぷりと言つた表情をしている。

返り血を浴びながらもその場に悠然と立つその姿。

だが、その風貌はとても50人の不良<sup>ヤンキー</sup>を倒したものとは思えなかつた。

そう。

なにしろ、襲われた張本人である『彼女』は『まだ中学生』だったのだから。

だが、朱色の髪を風に靡かせ、敗者の上に立つ姿はどうか口<sup>ロ</sup>者では無い雰囲気を醸し出している。

「う、うるせえ！お前がいるところとしてもいろいろやり辛れ  
ーんだよ！」

「だからって50人も差し向けるこ<sup>ト</sup>たあないんじゃないすかね……？」

実はこれまでにも彼女は前田に何回か襲撃されたことがあった。

ジャックナイフ使いの男や暴走族の男など明らかにヤバそうな雰囲気の者たちもいた。

だがそれも「こと」とく撃破されてきたのだ。

「さてと…次はアンタの番だぜ、前田サン?」

「ひいー!」

「忘れてないでしょ?アタシが名の知れた殆どの拳法の有段者  
つてこと…」

指を鳴らしながら前田に近づく少女。

体格では身長180位はある前田と150程の少女と、かなりの差  
がある。

体重も、体つきも前田の方が数段上。

だが、この実力差ではそんな物まったく意味が無い。

一応前田もそこそこの実力の持ち主だ。

この集団をまとめるリーダーなのだから、それは当然ではある。  
しかしこの少女の前では無力。

と、その時…

「う、うう…」

後ろで倒れていた前田の部下の一人がうめき声を上げながら目覚め  
た。

だが、少女はそれに気付いていないようだ。

あらかじめ別の部下が持つてきた、建設用の角材を拾い上げる前田  
の部下。

そして、それを勢いよく少女の頭に振りかざした!

「てめえ、死に晒せやあーーーーー！」

角材が少女に直撃した！  
鈍い音が辺りに響き渡る。  
そして…

バタッ…

アスファルトの上に倒れ、意識を失う。

前田の部下が。

確かに角材は少女の身体に直撃した。

少女の『肘』に。

角材をエルボースマッシュで粉碎し、その勢いで前田の部下を一撃KOしたのだ。

「せじと、続きを…」

改めて前田の方を見る少女。  
しかし…

「ぐ、覚えてる…」

道路に倒れる多くの部下を無視しその場から離れる前田。  
もつとも、この光景は既に見慣れた光景だったので彼女は何とも思  
わなかつたが。

「こつも逃げられるなあ、半殺し位にしてナバにいんだと思つナビ  
…」

そつ言いながら携帯を見て時間を確認する少女。  
表示された時間は…

「七時二十分…? ヤバい…!」

そう言いながら、持っていたポケットティッシュで返り血を軽くふき取る。

そして、カバンと柔道着を抱えて少女は学校へと向かつた：

## プロローグ（後書き）

『電腦戦記』まどか マギカ 救世のティマー達』で今の章が終わ  
つたら東京のお台場をメインに戦う章（『お台場編』）を書こうと  
思うのですがどうでしょうか？もしあちらの小説を読んでくださる  
方がいたら、意見を頂けると嬉しいです。

## 登場人物&魔女紹介（前書き）

登場人物などの紹介です。

これから読む人には若干のネタバレがあるかもしれません。  
何となくイラストを追加してみました。

大体こんな感じです。

（また、登場人物の名前については殆ど「元ネタ」が存在します。  
暇な人は探してみてください）

## 登場人物&魔女紹介

『主人公サイド』

切札 勝美  
きりふだ かつみ

> i 3 1 5 6 7 — 4 0 0 1 <

見滝原中学の二年生

初登場話 プロローグ

この作品の主人公。

見た目は美少女、中身はこわい。

様々な拳法の有段者であり、恐るべき戦闘能力の高さを見せる。

前田の50人の部下を瞬殺するなどその実力は折り紙つき。

バーミリオン・カラー  
朱色の長髪がトレードマーク。

一説ではツキノワグマも倒したとか…？

遊城梓芦  
ゆうき しづ

> i 3 1 5 6 9 — 4 0 0 1 <

見滝原中学の一年生

初登場話 第一話

かつみの後輩。

白髪のサイドテールが特徴の小柄な生徒。

美術部員であり、そつち方面の腕はかなり高い。

しかし、ある日の帰り道に三年の先輩に襲われてしまつ。そして顔に一生消えない傷を負つてしまつた。

キュウベえと契約し、魔法少女となつた。

不動紫保  
ふじょう しづほ

> 131570 — 4001 <

見滝原中学の三年生

初登場話 第四話

かつみの先輩。

生徒会副会長であり、かなり厳しい。

また結構キツイ性格でもあり、不良生徒などを『クズ』などと罵ることがある。

その名前と同じく、紫色の髪をしている。

風間遊子  
かざま ゆうこ

> 131587 — 4001 <

見滝原中学の三年生

初登場話 第五話

かつみの幼馴染。

実家が神社であり、靈感が一族で最も強い。

そのため、将来を期待されているらしい。

しかし本人はそんなことを気にしている様子は無い。

## 全員集合

『不良・ヤクザグループ』

前田

見滝原徳丸高校の二年生  
初登場話 プロローグ  
かつみを襲つた不良グループのリーダー。  
50人の部下を瞬殺される。  
あだ名は『ウルフの前田』。

来馬

見滝原中学の三年生

初登場話 第四話

梓芦しろを襲つた犯人。

かつみにボコボコにされた。

『原作キャラ』

鹿目かなめまどか

見滝原中学の中学一年生

鹿目かなめまどか

見滝原中学の中学一年生

初登場話 第一話

仁美と柔道の時間に組んでいたが、かつみとも組むことになった。  
今のところの出番は殆どない。

暁美ほむら  
あけみ

見滝原中学の中学一年生

初登場話 第七話

かつみ達のクラスに転校してきた少女。  
どこか不思議な雰囲気のする少女だが…

早乙女和子  
さおとめ かずこ

見滝原中学の英語担当の先生

初登場話 第一話

かつみ達の担任の先生。

余計な話が多い。

志筑仁美  
しづきひとみ

見滝原中学の中学二年生

初登場話 第一話

かつみに柔道の授業中に本気の技を喰らいダウン。  
病院に運ばれてしまった。

キュウべえ

初登場話 第二話

かつみと梓芦の前に現れた謎の生物。

その目的は…?

『その他』

瀬道亞衣  
せとう アイ

中学一年生

初登場話 第八話

『魔法少女狩り』に有つた少女。  
死にかけの所を梓芦に救われた。  
魔法少女時は海賊風の服装になる。

『魔女』

化学の魔女

初登場話 第二話

性質は昇華。

かつみと梓芦が戦った魔女。

全身がスライム状の、蛇のような姿をしている。

大量の触手で攻撃も可能。

しかし、その特性が仇となり石膏攻撃とかつみの一撃で擊破された。  
・かつては将来を期待されていた化学者だつたらしい。

書物の魔女

初登場話 第五話

性質は追及。

かつみと紫保が戦った魔女。

本や紙を身に纏ったゴーレムのような姿をしている。

巨大な体と強大な力を持つため一対一の直接戦闘は避けた方がいい。

体中の紙が特徴であると同時に弱点もある。

・かつては医者を目指していた少女だったらしい。

硝子の魔女

初登場話 第七話

性質は鮮明。

かつみ達がに戦った魔女。

梓芦のサポートを受けたかつみの一撃で粉々になった。

ビンのような姿をしているが、中の液体に浮かんだ小さな人形が本体だ。

・いろいろな物を大切にしていたとある少女が魔女化したらしい。

**登場人物&魔女紹介（後書き）**

隨時更新予定です。

## 第一話 もしアタシなら 戦うね

前田の部下を全員倒し、学校へと向かうかつみ。しかし、奮闘虚しく結局遅刻してしまった。

実はかつみが前田一味に襲われるようになつたのは今月に入つて三回目だつたりする。

(そのたびに瞬殺しているのだが)

理由としては、前田の所属するグループのリーダーに因縁を付けた(ほんの些細なことなのだが)と言うのが理由だ。

学校側には『不良に襲われている』とは言つていない。

(結果だけ見たらこちらが加害者と思われてしまつたため、大事にしだくない)

しかしその所為で既に今月に入つて三回ほど遅刻をしてしまつている。

今日も職員室で朝から担任の早乙女先生にお説教を喰らひ「とにかくつてしまつた。

「今後は気を付けましょうね。…次は確か体育ですね。遅れないようここ一工夫

「はーい!」

軽く注意を受け、職員室を出るかつみ。

一限目の授業は体育。

しかも、今行つてゐるのは柔道。

彼女の最も得意とする教科だが……

「そりゃ、陸上は別の曜日だつたつ。柔道やりたくねえなー……」

そう呟きながら柔道場へと向かう。

何故、得意教科の体育を嫌いする必要があるのか？

それは授業が始まると同時にすぐに分かつた。

皆と一緒に更衣室で柔道着に着替え、自身の朱色の長髪をゴムで止める。

そして帯を巻く。

『黒帯』を。

かつみは柔道、いや名の知れた殆どの格闘技の有段者なのだ。

柔道はもちろん、空手、合気道に少林寺拳法、テコンドー……

その他にも段は取っていないものの、幾つかの格闘技を経験したことがある。

(以前、力の加減を間違えて何人か病院送りになりかけたものもいる)

他のクラスメイトはそんなかつみを恐れて試合をしたがらないので。案の定、今日も一人だけ組手の相手を見つけられずに余ってしまった。

「そーだよ、ビーセアタシは皆の嫌われ者だよー！」

半ばヤケクソ気味に叫ぶかつみ。  
別にかつみが嫌われている訳では無い。  
しかし、前述した事件やかつみの実力などから体育などでは自然と  
浮いてしまうのだ。

「あの、良ければ私達と一緒にやりませんか？」

そななかつみを誘ったのは、同じクラスメイトの志筑しづき 仁美ひとみだつた。  
仁美はすでに友人の鹿目かなめ まどかと組んでいたが、かつみを自分たちの組に入ることにしたのだ。

相手も決まり早速、組手を始める。  
まずはまどかと仁美。

まどかは完全素人なのだが、仁美は習い事か何かでやっているらしく型等もそこそこできている。

「「美ちゃん強すぞるよ~」

「ふふ、じゃあかつみさんお願ひします」

「お、ねむ」

そう言って組手を始める一人。

とはいっても、やはりどうしても実力差と言つのがはつきりとわかつてしまつ。

完全に仁美の動きを読み、手玉に取るかつみ。

そして隙を突き、後ろに回り技をかける。

それはかつみの最も得意とする必殺技：

「てやあ！体落としー！」

体落とし…

相手を投げ落とす柔道の技の中でも割と基本的な技だ。

小柄な体でも無理無くかけれることから、かつみはこの技を愛用している。

今回もうまく決まり、見事仁美相手に一本を取ることが出来た。しかし…

「仁美ちゃんの意識が無いよ…」

「マジで…？」

上手く効きすぎた。

打ち所が悪く、意識を失つてしまつてしまつた仁美。

しばらくして何とか意識は戻ったが、脳波に異常がないかを調べるため病院に送られることになった。

(ちなみにこの時、同じく病院に入院していたクラスメイトの上条恭介に恋するのだがそれは別の話)

仁美が病院に運ばれ、授業も中途半端な所で中断してしまった。

「（後で病院について謝りについて）」

そう思いながら、その後の授業をこなすかつみ。

そして放課後…

今日は部活はやらずにそのまま病院に行くことにした。

かつみは柔道部や空手部など幾つかの部活を掛け持ち（元々は柔道部だったが、別の部活に助つ人として呼ばれることがある。大会が近いのでなおさらだ）しているので部活が結構忙しかったりする。部活の顧問に理由を話し、部活を休む許可ももらった。

校門を出て、病院へと急いでとするかつみだが…

「かつみさん…」

校門前でかつみを呼ぶものがいた。

かつみよりも小柄な白髪のサイドテールの少女。

頬に大きな絆創膏が張られており、怪我でもしているのだろうか…？

「じゅーじつした？」

しろと呼ばれた少女、本名は遊城梓芦。  
かつみの後輩の美術部員だ。

一年生だが、上級生に絡まれていた所をかつみに助けられて以来、  
何かと一緒につきあつよつになつた。

「ちよつと話したい」とがあるんです…」

「ああ、いいぜ。でもこの後病院行かないとダメだから、そこまで  
な

頷く梓芦。

だが、何か様子がいつもと違う。

いつもと違い、今日は何か元気が無い様に感じる。  
いや、生気が無いと言うべきか…

それに頬の大きな絆創膏は一体どうしたのか？

何か聞こうとも思つたが、どう聞けばいいか分からない。  
いきなり聞くのも何か失礼な気がする。

一緒に歩いているうちに、梓芦は自身の重い口を開けた。

「私…昨日、学校の帰り道に三年生の先輩に襲われたんですね…」

「…マジか?」

梓芦の口から出た言葉に、思わず聞き直すかつみ。

頷く梓芦。

頬の絆創膏はやつらがう事だったのか…

言われてみれば、足などに青いアザも見える。

「辺りは暗かったし、助けも呼べませんでした。いろいろ痛いこと  
されて…」

「……」

涙ぐむ梓芦。

かつみはそれを黙つて聞くことしかできなかつた。  
どのようなことをされたかは容易に想像がついた。  
それだけに、どう話せばいいか分からなかつた。

「痛いのは我慢できました。その時だけ耐えればいいんですから…  
でも…」

そう言つて頬の絆創膏を取る梓芦。

恐らくその時に付けられたのだろう。

そこには、見るも無残な傷の跡があつた。

血は止まっているが、切り傷の様な跡がギザギザにういている……

地面に押し倒されて、その時に頬を落ちていたガラスの破片で斬

11

「JRの傷は深すぎて、整形で治す」とすり難いこと言われました。」

中学、高校生と言うのは、人生の中でも特に大事に時期だ。  
勉強、遊び、そして恋愛。

痛み、苦しみ、恐怖：

そして、一生顔に残り続ける傷…

「かつみさん…かつみさんなら私と回り境遇になつたひいひしますか？」

「…やあな。でももしアタシなら、戦うね！」

「戦う…？」

「やつや。どんな方法でもいいからそいつに一撃を与えてやれ！」

思わずこいつのノリで言ってしまった。

本当はもつといふべきことがあるのかもしれない。  
だが、今のかつみにはその言葉が分からなかつた。

梓芦は足を止め人通りのない路地を見つめる。

そして、何かに誘われるようこそその裏路地へと入つていった。

「あ、おー病院はそつちじや…」

だが、梓芦にその言葉は届かなかつた。  
ふらふらと裏路地の奥へと入つていく。  
しづしづがなく、かつみは梓芦の後を追掛けた。

「（なんだ？）どうしたんだ、しろの奴？（）」

そう思いながら、後を追いかけるかつみ。

たしか、この路地を抜けた先は古い化学工場があつたはずだ。何十年前か前はこのあたりの産業を代表する建物だつたらしい。しかし、今では廃業し工場もただの廃墟と化している。めつたに人も立ち寄らず、荒れ放題の場所だ。

「（そんなところに…何で？）」

路地を抜け、廃工場のある広場へと出るかつみ。辺りを見回すと、梓芦はその廃工場の扉を開け中に入ろうとしていた。

この工場の中は昔の機材が今でも残つており、立ち入り禁止になっている。

しかも、建物の柱や屋根が老朽化しておりいつ崩れてもおかしくはないとまで言われている。

そのため立ち入り禁止区域に指定されているのだが：

「あ、おいーしろー！」

かつみが叫ぶも、梓芦には届かない。工場へと入っていく梓芦。

このあたりは再開発地区に指定されているためこの時間帯には人は居ない。

そんな中、廃工場の中で事故が起きたら満足に助けも呼べない。

携帯は家に忘れてきてしまつたし…

「力づくで連れ戻すしかないか…」

そう言つて廃工場の扉を蹴破り中に入るかつみ。

中には古びた機材や錆びついた機械などが所狭しと置かれている…

そう予想していたかつみ。

しかし、彼女の目の前に広がる光景は予想とは、まるかに異なるものだった。

「な、何だよこれ…」

そこに広がるのは、この世の法則を無視したかのような空間。  
底知れぬ絶望が支配する世界だった…



## 第一話 碎けろ！！

梓芦を追掛けで街外れの廃工場へとやつて来たかつみ。

だが、工場の中はかつみが想像していた空間とはまるかに異なつていた。

この世のものとは思えない、幻想的で不気味な光景が目の前に広がる。

空中には、巨大な実験器具のフラスコやビーカーなどが浮かび、地面には薬ビンや薬包紙などが乱雑にばら撒かれている。

まるで、実験室に置かれている器具を適当にばら撒いたかのような空間だ。

「一体これは……！？」

目の前に広がる世界は本当に現実なのか？

あまりにも信じがたい光景なため、思わずそう思つかつみ。

念のために壁を軽く殴つてみた。

：痛みを感じた。

つまり、この光景は夢なんかでは無く『現実』に起きていることと言つことになる。

目の前の光景をいまいち信じきれずも、とりあえず梓芦を探すこととしたかつみ。

こんな不気味な空間に長居する気は無いが、梓芦だけは連れ戻したかつた。

「（何なんだ）の空間は、少なくとも廃工場では無いな」

走りながらそう思つかつみ。

改めて辺りを見回しても、不気味な世界が広がるばかり。  
薬ビンを置いた棚や大きなタンクなど…

しかも、それらの影から小柄な『何か』の影が見える。  
怪しい気配も感じる。

この感じを、かつみは何度も感じたことがある。  
以前、ヤクザや前田の部下に囲まれた時と同じだ。

「（殺氣…ー）」

殺氣を感じ取ると同時に、物陰からその殺氣の主が飛び出しかつみ  
に襲いかかった。

その攻撃を軽く避け、相手との間合いを取る。  
だが、その攻撃の主に驚くかつみ。  
かつみを攻撃したのは…

「なんで… 私だけ…」

かつみを攻撃したのは、この工場に入り行方が分からなくなつてい  
た梓芦だった。

鉄の棒を両手で持ち、それをかつみめがけて振りかざしたのだ。

「し、しろーおまえ……」

そう言つている間にも、梓芦は容赦なくかつみに鉄の棒で殴り掛か  
る。

しかし、それらは全てかつみに避けられる。

無理もない。

かつみは気配だけで相手の未来位置をある程度予測することも出来  
るほどの達人。

暗闇で後から奇襲されても、ある程度なら反撃可能だ。

それに対し、梓芦は格闘技等に関しては全くのド素人。

持つている鉄の棒もかなり大きく、梓芦の方が鉄の棒に振り回され  
ている印象さえ受けれる。

しかも、今の梓芦はどこか様子が変だ。  
目も虚ろで、まるで感情が無い様な…  
そんな感じが。

「なんで… 私だけ… なんで… なんで… ！」

「（へつ… 一体なんなんだよ…）」

どうしたらいいか分からなかつみ。

このままこの訳の分からぬ空間で逃げ回っているわけにもいかない。

ならば…

一瞬の隙を突き、梓芦の背後に回るかつみ。

梓芦の後頭部に一撃を喰らわせる。

「あ…！」

「しづらぐ氣絶してくれ」

その場に倒れこむ梓芦。

梓芦を抱え、この空間の出口へと向かおうとするかつみ。  
しかし、出口が分からぬ。

さつき入ってきた入り口は、梓芦から逃げる内にどこにあつたか見失つてしまつた。

他に出口があるかもわからない。

仕方がないので、地道を探すことにした。

梓芦を抱えながらなので少し辛いが、それも仕方がない。

いくら梓芦が小柄とは言え、人間一人を抱えながら歩くと言つのは結構疲れる。

「へりやへ出ロせじ」だー。」

そう言いながら辺りを探すかつみ。

いくら探しても出口が見つからない。

そう書いて歩いているうちに、『じゅや』『じゅや』とした空間から広間へと出たかつみ。

ここが、この空間の中心部なのだろうか？

先ほどまでの空間に有つた乱雑に積まれた薬品やビーカーなどはここには無く、ただ広い空間が広がるのみ。

ゆっくりとその中に入つていこうとするが…

「う、うわー！」

突如、大きな地鳴りが当りに響く。

まるで大きな地震が起きているようだ。

それと同時に、地面が割れ中から巨大な『化物』が現れる。  
ゆうに10mはあるだろうか？

スライム状の、大量の触手を持つ蛇のような姿をした異形の化物が…

「あ、氣色悪い！……！」

かつみが思わず叫ぶ。

その声に反応したのか、化物はかつみの方へと触手を伸ばす。それを何とか避けるも、梓芦を抱えながらでは結構きつい。

梓芦をこの空間の入り口の方へと置くと、再びかつみは化物の前へと出る。

「（こいつがこの世界の親玉ってわけか。そう言ひ感じがするぜ）

この化物を倒さなければ自分たちはこの世界から抜け出すことは出来ない。

そう感じたかつみは、ある決意をした。

『この化物を倒す』、と。

梓芦がおかしくなったのもコイツの仕業に違いない。

そう思うと、かつみの胸に怒りが込み上げてくる。

「うおお……」

襲いかかる触手を全て避け、本体へと近づく。

勢いをつけ化物の頭部へと飛びかかる！

そして、全身の力を込めたかかと落としを化物に喰らわせた！！

しかし…

「な、攻撃が…効かない…！」

相手は全身スライムの化物。

打撃系の攻撃は全て衝撃を吸収されてしまうのだ！

何とかもう一撃を与えようとするが、それも虚しく触手に掴まってしまった。

人の腕程の触手をぐるぐるに巻かれ、動きを封じられるかつみ。抵抗するが、一向に解放される気配はない。

さらに、化物はかつみを自身の体内に放り込んでしまった！スライム状の化物の体の中に取り込まれてしまつたかつみ。何とか出ようとがくが、全く手こたえを感じられない。

「（くそ…早くここから出ないと…息が…）」

化物の体内に取り込まれてしまい、必死でもがくかつみ。この体内に酸素はせず、息をしようともできない。

「（ぐ…意識が…）」

意識が徐々に遠くなつていいく。

その中で今までの思い出が走馬灯のように流れれる。

幼い頃、家族全員で一緒に過ごした頃…

部活の合宿の時、山で遭難したこと…

このままでは間違いなく死ぬな…

みんな「めんな

梓芦はどうなつちまうんだ…

早乙女先生、別に食事の好みなんて人それぞれだろ…

前田、つざかつたなあ…

そう思いながら確実に視界が暗くなつていいくのを感じる。

まるで暗い海に沈んでいく気分だ。

完全に視界が暗くなつた…

その時…

「たあーーー」

何者かが、取り込まれていたかつみを化物の身体から押し出した！  
思い切り地面に叩きつけられるかつみ。  
しかし、体にへばりついていた化物のスライムの破片のおかげで怪我をする事は無かった。

「ゲホ！…ゲホ！…！… 一体なんだ？」

「一体何が起きたのか理解できない。  
誰かが助けてくれたのか？」

しかし、今ここにはこの化物と自分、そして梓芦しかいない。

まさか…

そう思い、化物の方を見るかつみ。

そこにいたのは、全身に白と透明の衣装を纏い空を舞う梓芦だった。  
まるで、子供向けの漫画やアニメの主人公のようなその姿。  
右手に1メートルはある大きな筆を、左手にはパレットを持つてい  
るのは美術部員の梓芦らしいと言えばらしいが…

「しり……おまえ、その恰好！？」「

「説明は後です！今は魔女を倒すことが先です！」

「魔女……？」

良くわからないが、この化物が『魔女』と言つのか…  
だが、スライム状の身体にかつみの攻撃は全て効かない。  
攻撃を加えても、先ほどのように吸収されるのがオチだ。

「相手はスライム、それなら……！」

そういうと、梓芦は手に持つた『大筆で空に大きな円を描く。魔女をすっぽり包み込むほど大きな円を。

「固めてあげるわ……！」

その円の中から現れたのは、大量の白い粉だった。  
粉は魔女に振りかかり、魔女を真っ白に染めていく。  
巻き添えを食わないように、入り口の所にかくれる梓芦とかつみ。

やがて粉が収まった。

そして入り口から恐る恐る覗いてみると、セヒにいたのは…

「ハ、これは…！」

全身を白く染まり、まるで石膏像のように動かなくなつた魔女の姿  
だった。

だが、自重により全身にひびが入つてい  
今にも崩れそうだ。

「すげえ、石膏像みたいになつてるぜ。しかも、ちつきの粉は…？」

「そのまま、石膏です。ただし、私が作りだした超速乾性の物です  
けどね」

「やつらの事か… よし、今なら…」

そう言つと、かつみは勢いよく物陰から飛び出し魔女へと近づき、  
先ほどのように大きく跳ぶ。

そして、魔女の身体の最もひびの集中している部分へと思い切りの  
一撃を加えた！

「これでどうだ……碎けろ……」

その攻撃により、ひびは徐々に多くなりやがて魔女を包んでいく。それは、さながら昆虫がさなぎから羽化する時のことだ。だが、ここから新たな命は生まれない。

魔女の身体はボロボロとまるで壊れかけの土壁のように崩れ去ってしまった。

それと同時にかつみたちを包んでいた空間も消える。辺りは古い廃工場へと戻つていった。

既に日は沈み、月の光だけが廃工場に差している。屋根のトタンは所々剥がれ、窓のガラスも割れている。其の為だろう。

この光景も先ほどの空間ほどではないが、幻想的だ。かつみは早速先ほどの出来事を、そしてその恰好について梓芦に訊いた。

「まあ、いろいろ聞きたいんだけど……まあその恰好は何だ？」

「ええっと……」

「それにさつきの化物は？魔女って言ってたけど訳が分からね」

「うーん…？」

「一番最初、なんでお前はアタシに襲つてきたんだ？それも分かんねよ」

頭をさすりながら、どこから説明すればいいか迷う梓芦。しかしその二人の前に『一匹の獣』が現れた。

白い体毛に身を包んだネコのよつたな真紅の眼をした生物。だが、どこか異様なオーラを出すその獣の名は…

「あー・キュウベえー！」

『キュウベえ』と呼ばれたその生物は梓芦の元へとやつてくると、その胸の中に飛び込んだ。

頭を撫でられながら、気持ちよさそうな顔をしてくる。

「な、何だソイツ？」

「これ？これはキュウベえって言つてます」

「ちひじやなくて…」

キユウベえは梓芦の胸中から降りると、かつみに対し自己紹介を始めた。

どうやら、このキュウベえと呼ばれる生物は人間との会話ができるよつだ。

『ぼくはキュウべえ。君たちのような少女にお願いがあつてこの世界に来たんだ』

『 とても簡単なことだよ。君も僕と契約して、魔法少女になつて欲しいんだ!』

## 第一話 碎けろー！（後書き）

梓芦は梓芦<sup>しる</sup>って呼びます。  
結構多く出てきているので…  
(一話と登場人物紹介にフルネームは出ていますが、一応)

## 第三話 なにそれこわい

かつみと梓芦の前に現れた白い獣。

人語を理解し、人と対話するソイツの名は『キユウベえ』といった。先ほどの工場内で戦った『魔女』といつ物といい、訳の分からぬ物が多すぎる。

今日会つた多くのことが、かつみの頭の中を駆け巡る。

『君も僕と契約して、魔法少女になつて欲しいんだ!』

そう言つ白い獣キユウベえ。

契約…?

良くわからないがそれをすれば『魔法少女』という物に成れるとう事か?

…ここでかつみの頭の中で先ほどの梓芦の言つた言葉が蘇る。

「（確かに、さつきしろはあるで魔法みたいな技を使ってた…それに今のしろの恰好…）」

先ほどの魔女に喰らわせた石膏責め。

あれはまさに魔法だったのではないか?

それに梓芦は空を飛んでいた。

かつみは改めて、梓芦の姿を見た。

そう言われてみれば、今の梓芦の姿はまさに『魔法少女』と言つた姿だ。

「じい、お前まさか…」

「はい。私はキュウベえと契約して魔法少女になつたんです！」

あの魔女との戦いの時、魔女に取り込まれていたかつみを救えるのは梓芦だけ。

しかし、梓芦にそのような力は無い。

そこに現れたのがキュウベえだった。

キュウベえは梓芦に魔法少女についてを簡潔に話すと、契約を促した。

あの時、魔法少女となつた梓芦がいなければ確実にかつみは死んでいただろう。

『魔法少女となつた者は、その生涯を賭けて魔女と戦う使命を背負うことになる。しろ、君はその覚悟が出来ていた…』

「あの時、かつみさんを助けられるのは私しかいなかつたんですか  
ら……当然です」

「しる……アタシを助けるために……」

魔法少女は魔女を倒すために戦い続ける。

当然、今の梓芦もその宿命には逆らえない。

「ありがとうな……それに『ごめんな』お前にそんな重い物を背負わせ  
ちまつて……」

「いいえ、いいんです。それに元はといえば私があんな工場に入っ  
たのが原因なんです……」

あの時、何故梓芦は工場に入つていつたのか？

中に魔女がいたことから、魔女が梓芦を引き寄せたのか？  
だとしたら何のために？

そもそもどうして梓芦だったのか。

あの時のことを何か覚えてないか、梓芦に尋ねた。

「うーん、それが何も覚えていないんです。、かつみさんと一緒に

話してたところまでは覚えてるんですが……

「そりゃ。じゃあいつたい何で……」

『たぶんそれは「魔女の口づけ」が原因だよ』

キュウベえが言つた『魔女の口づけ』：

それは魔女が特定の人間の精神を操つたり、異常にしたりするとき  
に人間につけられる刻印のようなモノだ。

あの時の梓芦は、襲われたことを思い出し感情が一時的に憎悪や悲  
しみで満ちていた。

そこを魔女につかれたのだらう。

『魔女は人々に災厄や絶望、悲しみをもたらす存在。倒さなければ  
被害を受ける人々は次々増えていくよ』

「魔女…許せねえな……！」

そう言ひと、かつみは己の拳を握りしめる。

元来、曲がった者が嫌いな性格。

人に災いをもたらすそのようなモノの存在を許すことも出来なかっ  
た。

よく言えば正義感あふれる人物。

悪く言えば単純な性格だが。

「よし！アタシも魔女退治に協力してやるよー。」

「か、かつみさんもー？』

『まず魔法少女って何なんだ？契約って何をするんだよ？』

かつみはまだ魔法少女の事をほとんど知らない。

いや、それは梓芦も同じ。

先ほどはかつみを救うために急いで契約したため、キュウベえからは殆ど説明も聞かず魔法少女となってしまった。

そのため、二人とも魔法少女についてはその実態をほとんど知らないのだ。

キュウベえは一人に簡単な説明を始めた。

『まず、魔法少女が魔女と戦う宿命を背負うっていうのは話したね』

『ああ。しひはずつと戦い続けなきゃならないんだろ？』

『何故戦い続けなければいけないか？それは彼女の持つ「ソウルジエム』の穢れを取るためになんだ』

そう言われ、梓芦はキュウべえの言つた『ソウルジエム』を取り出した。

卵のような形をした宝石に美しい装飾が付けられた物だ。だが、その宝石は透き通っているといつわけでは無く少し濁つた感じがする。

『魔法少女が魔法を使うたびにこのソウルジエムは穢れて行く。その穢れを取るために魔女を倒し「グリー・フシード」を得なければならぬんだ』

「かつみさん、これがグリー・フシードです」

グリー・フシード…

ソウルジエムとは異なりどこか異様な雰囲気の物体だ。黒く染まった木の実のような、植物の種のような…梓芦はそれをソウルジエムに近づけた。すると、ソウルジエムの濁りが段々と消えて行つた。

「おお～」

『穢れを取らないと大変なことになるからね

「大変なことって何だ。爆発でもするのか?」

「かつみさん、いらっしゃなんでもそれは…」

『うん爆発するよ』

「なにそれこわい」

「ど、どうこういって？キュウベえー…？」

梓芦に訊かれ、キュウベえは更なる詳細を話した。正確にはソウルジエムが碎けてしまった。ソウルジエムとは魔法少女の魂を結晶化したもの。それが碎けてしまったとき、魔法少女は死を迎える。そして、その碎けたソウルジエムはグリーフシードへと変わり魔女へとなるのだ。

「え～っと魔法少女が魔女で魔女が魔法少女で爆発して…」

「つまり、魔女を生み出しありからソウルジエムに穢れを溜めてはいけないってことですね。」

「魔法を使う以外で穢れが溜まつてしまつて」とはあるのか？全部話せよ――――！」

キュウべいの肩（？）を掴みブンブン揺らすかつみ。

爆発の部分以外あまり理解していないが、とりあえず穢れを溜める  
と大変なことになるということは分かった。

もし後になつて変に穢れを溜めてしまつては後悔する』ことになる。

今のうちに効けることは聞いておいた方がいいだろ？

『わかつた！わかつたよ！』

「よーしそれでいいんだ…」

「（かつみさん怖いな…）」

『穢れが溜まるのはずっとソウルジュムを放置していた時さ。グリ  
ーフシードを得なければ自然と溜まつてしまつ。それと…』

「それと？」

『魔法少女が果てしない絶望を味わったとき、ソウルジュムは黒く  
濁つていく』

「なにそれこわい」

『さあかつみ、君も魔法少女になるのかい？』

そう言われ、思わず魔法少女となつた自分を想像するかつみ。

梓芦はその名と髪の色の通り『白色』をベースとした色のコスチュ

ームに身を包んでいい。

なら自分もそうなるのか…？

自身の髪と同じ、朱色の装束を身に纏つかつみ…

…ちょっと似合わなかつた。

「魔法少女は…やめておく。似合わなきうだしな。でもー。」

握りしめた拳で工場に置かれていた古い機材を思いきり吹き飛ばした！

2～3mはある巨大な機材はバラバラに砕け散り、残った一部のパーツも壁に叩きつけられる。

「アタシにはこの力がある。しづが魔法なら、この拳がアタシを守る力だ！」

『拳ねえ。まあ別に強制はしないよ。ただそれでいつまで戦つて行けるか…？』

「そりですよー…やっぱり契約しておいた方が…」

かつみが幾ら強いとは言つても、それは『常識』といつ範囲内に過ぎない。

戦う相手はその『常識』という物を超えた存在。

魔女なのだ。

そんな存在に単なる一個人がどう立ち向かおうというのか…

魔法少女にも幾つかリスクは存在するが、生身で戦うよりはずつとましだ。

「魔女化やソウルジエムが碎かれたら即死とか、いろいろ弱点ばかり。利点は無いのか？」

『もちろんあるよ。魔法少女に契約する時、その少女の願いを僕が叶えるのさ』

そう。

これこそが魔法少女になる最大のメリットともいえる。  
よほど滅茶苦茶な願いでもない限り、キュウべえは願いを対価として叶えてくれる。

もつとも、それが魔法少女の宿命と釣り合ひかどうかは分からないうが…

『それに怪我をしても魔力で修復すればすぐに直すことも出来る。  
さすがに病気とかは無理だけどね』

「なんだ、結構利点もあるじゃないか！」

『気が変わったかい？魔法少女になつてよー。』

「それはやめておく。今叶えたい願いも無いし……」

「そうですか？例えば柔道の全国大会優勝とか……」

「願いで行くつていうのはなんか自分の力を裏切るみたいでちょっとな……」

他に叶えたい願いも今のかつみにはない。

願いで力を得てもそれは今の自分を裏切ることになる。

『叶えたい願いが無い人間というのも珍しいね。……気が向いたらいつでも呼んでも。すぐに契約してあげるから』

そう言つと、キュウベえは夜の闇へと消えて行つた。  
かつみ達も、いつまでもこの廃工場にいるわけにはいかない。  
今日はもう帰ることにした。

「じゃあな、しふ」

「はい。魔法の力……これでかつみさんと言われた通りのことが出来

ます「

「へ？」

「明日、私を襲つた先輩をこの魔法で…」

「ちょ…ちょっと待つて…！」

「何ですか？」

確かに戦えとは言つたが、あれは勇氣づけるためであつてまさか本  
気で言つたわけでは無い。

それに、いくら相手が最低な野郎とは言え魔法と人間じゃ（かつみ  
以外では）かなりアンフェアな戦いになる。

それによより、そんなことを梓芦にさせて彼女の手を汚させたくない  
かつた。

「いくらなんでも一般人相手に魔法はまずいだろ…」

「まあそりがもしれませんが…」

「…アタシに任せてくれよ。全部肩を付けてやるから…」

普段喧嘩慣れしているかつみなら、大丈夫だろう。

いろいろな意味で。

かつみは梓芦に、『一般生活で魔法は出来る限り使つな』と言つた。

翌日、梓芦を襲つた先輩はかつみにボコボコにされた。  
全治一か月の重傷だつたらしい。.

## 第四話 精々半殺しだから

あの魔女の戦いの翌日…

かつみと梓芦は昼食時に学校内の学食で話をしていた。

梓芦に襲つた先輩をボコボコにしたと言ひ事を…

「別にお前は手を汚さなくてもいいんだよ。アタシはいつこの慣  
れてるからさ」

「は、はあ…」

「やつにえぱしろ、お前はキュウべえに何を願つたんだ?」

叶える願いが無ければ魔法少女にはなれない。

ということは梓芦にも何らかの願いがあつたということだ。

それはいつたい何なのか。

と、そこでかつみはあることに気が付いた。

梓芦の顔に張られていた大きな絆創膏が無くなつていたのだ。

もちろん、あの大きな傷もなくなつている。

昨日帰り道で見たときは確かに有つたはずだ。

ところによく…

「私がキュウべえに願つたのは『傷つけられた身体を元に戻してほしい』…です」

「傷つけられた身体、か…」

「はい。あ、でももう大丈夫ですからー」の通り治りましたし、かつみさんが仇を取ってくれましたから…」

そう言いながら、無理に笑顔を作る梓芦。

いくら相手を叩きのめしても、いくら身体を治してもらつたとしても、あの時受けた『心の傷』までは治せない。これから先、今回のこと我が梓芦のトラウマにでもならなければいいのだが…

「でもかつみさんは大丈夫なんですか？そんな」として先生にもばれたら…」

確かに相手を喧嘩で叩き潰したなどと学校側に知れたら大変なことになる。

かつみは柔道の県大会などでもかなり高成績を収め、全国大会にまで出場したこともある。

そんな者が傷害事件沙汰を起こしたと各地に知れ渡れば、最悪新聞的一面を飾るかもしない。

だが、かつみの顔はいたつて平氣そうだ。

「大丈夫だいじょうぶ。ちゃんとアタシがしたつてわからないようにして…」

と、ここまで話したところでかつみの言葉は遮られた。

「やうかしら、切札勝美さん？」

かつみと梓芦の座っているテーブルに、一人の女子生徒が現れた。  
紫色の髪と銀色の眼鏡が特徴的な、どこか高圧的な雰囲気のする彼女。

かつみと梓芦はこの少女が誰なのか知っていた。  
この見滝原中学の生徒会執行部副会長：

「あなたは…不動紫保先輩！」

梓芦が叫んだ。

もしかしたら今の話を聞かれていたのか？

最初のキュウべえの話や今のケンカの話など、いろいろと聞かれてはいけないことを話していた一人。

しかも相手は生徒会一厳しいということで有名な紫保先輩。正直、先生に今の話を聞かれても冗談半分に済ませることが出来るがこの先輩相手にはそうもいかない。

「切札さん、ちょっとといいかしら？」

かつみを呼び出す紫保。

梓芦はそれを止めようとするが…

「あの、先輩…」

「あなたに用は無いわ」

梓芦にそう言い放つと、紫保。

やはり先ほどの話が問題だったのだろうか？

紫保はかつみを生徒会室へと連れて行った。

「あの、アタシに何の用ですか？」

かつみが言った。

生徒会室には紫保とかつみ以外は誰もいなかった。  
てっきり生徒会役員と先生によつて吊るし上げでも喰らつのかと思  
つたが…

「あなた、今日三年生の生徒と喧嘩したそりね」

「えッ…………そ、わっさの話聞いていたんですか……？」

「……相手は三年の来馬隆文・かなりひどい怪我を負つたそりや…」

紫保が一枚のプリントを見ながら言つ。

そのプリントには、かつみの喧嘩についての詳細が描かれていた。

かつみは来馬を体育館裏に呼び出し、秒殺。

その後、自分がしたとばれない様に校舎の一階からボロボロになつた来馬を下に落としたのだ。

(さすがにそのまま落とすのはまずいので植木の上に落としたのだ

が)

かつみは『事故』に見せかけた怪我にしたかったらしい。

そして去つやまこ、まだ意識のある来馬に

「一度としろに近づくな。…本当に殺すぞ…」

…やう言つて。

「まあ別にあなたを責める気は無いわ。あのクズのストーカー行為には生徒会としても手を焼いていたし…」

「はあ…」

「虫を潰してくれた」と感謝してくるへりこよ

「やつですか…（結構きつい性格だな…）」

「やつやうり、叱られるところわけでは無いようだ。

その後の話によると、このことは紫保の方で事故として片付けられるようだ。

元々、かなり悪質なストーカーを何回かしていた来馬。だが、どれも決定的な証拠が見つからず注意も出来なかつた。しかし今回のことでもしは懲りるだらう。

「ヤレでひとつ提案があるの。…切札さん、生徒会に入らない？」

紫保の本当の目的、それはかつみを生徒会に引き入れることだった。柔道部のエースのかつみがいれば生徒会としても華がつく。あまり複数の部活などの掛け持ちは推奨されてはいないが、すでにかつみは幾つかの部活の助つ人として活躍している。生徒会も『その延長』として入つてほしいのだが……

「えー……それはちょっと……」

「あら？…どうして？」

かつみにもいろいろと予定等がある。

柔道部や他の部活の助つ人など……

これから季節は大会前なので結構忙しくなつてくる。  
そして最も重要な事。

梓芦と共に魔女と戦うという使命が……

「ま、まあそういうことでアタシは遠慮しておきます……」

そう言つと、かつみは生徒会室を急いで後にした。

「人生徒会室に残される紫保。」

窓から外を見つめながら紫保は小さく呟いた。

「切札勝美、彼女を何としてでも生徒会に引き入れてみせる……！」

- - - - -

放課後…

空は夕焼けに染まり、学校にいた者達も皆帰宅の準備を始めている。

今日は職員会議のため全ての部活が休みらしい。

学校から多くの生徒たちが出てくる。

その中に、かつみと梓芦の姿もあった。

「いやー僕は参ったよー」

「そう言いながら生徒会室での出来事を話すかつみ。

事件の事を隠してもらつたことや、生徒会に誘われたことなど…

「かつみさん、幾らなんでも来馬先輩を一階から突き落とすのは…」

「大丈夫だつて！死にはしなかったから。精々半殺しだから」

「そういひ問題じゃ…」

とその時、校門を出ようとしたかつみと梓芦の前に紫保が立ちはだかつた！

校門の上から飛び降り、彼女たちの前に現れる紫保。  
結構な高さの上にバランス感覚まで要求されるような場所に彼女は

一体いつからいたのか…

ここを通るまで気づかないかつみ達も妙だが、こんなところで待っている紫保はもつとおかしい。

実は変人なのだろうか？

「切札さんー生徒会に入りなさいー！」

「え、ええ？」

「い、一体どうこつことなの…？」

「惑つかつみと梓苅。

ここで断つても彼女の性格から、絶対に退かないだろう。  
それなら…

「はー」

紫保の隙を突き、勢よく学校の外に飛び出すかつみ。  
何とか紫保から逃げようと駆け出す。

陸上の成績は学年でもトップクラス。

直線距離ならだれにも負けない自信がある。

100m13秒ジャストはかなり早い！

あつという間に校門が見えなくなる。

梓苅には少し悪いことをしたが、これも紫保から逃れるためだ。

街外れの公園まで行つてようやく足を止めるかつみ。  
さすがにここまで追つてこないだろ？…

そう思つていたが…

「私が陸上部女子最速といつ」とを知らないの？」

「し、しまった！ そうだった！！」

紫保は女子陸上部の最速選手もある。  
かつみに追いつくことなど訳ないのだ。

「ああ、はやく生徒会に入りなさい。」

「だから入らないって言つてるじゃないですか！」

生徒会参加の紙をかつみに押し付ける紫保。

「うつ～うつ～

「先輩やめちくつ～

そう言いながら公園内を逃げ回るかつみとそれを追掛けた紫保。  
逃げ回っているうちに田は餘々に暮れ、公園の時計が七時ちょうど  
を刺した。

その時…

「あああーー！」

「な、何だーー？」

公園を闇が包み込んでいく。

夜の闇よりも暗い闇だ。

そして、そこに現れたのは以前廃工場に現れたモノと同じ…まるで図書館の書物倉庫のように大量の本が積まれた空間。天井、壁、あらゆるところに重力を無視し、本が置かれている。そう、これこそ魔女が己の身を隠すために張る、己の世界。

『魔女の結界』だった…

## 第五話 燃えりおおおおお！――

かつみと紫保の前に現れた魔女の結界。  
二人はその結界の中に取り込まれてしまつた。  
結界内には大量の本が重力を無視し置かれていた  
天井、壁、あらゆるところに…

「一体何なの？ これは…」

紫保はかつみと違い、魔女の事を知らない一般人だ。  
突如目の前に起きた『異常』に対応できず、周りをきょろきょろと  
みている。

大量の本棚と本…

そのうちの一冊を紫保は手に取った。  
随分と古い本だ。

紙も普通の紙ではない。

歴史の授業で習つた『羊皮紙』という物だろうか？

中身もドイツ語（？）らしき言語で書かれていて読むことが出来ない。

だが、辛うじて医術書か何かの類であることは理解できた。  
一方かつみは、この状況をどうするかを考えていた。

「（戦うか…？）」

梓芦がいない今、頼れるのは魔法では無く『力』と『頭脳』のみ。どうせ倒さなければこの結界からは抜け出せない。

そうなると当然、紫保の力も必要になる。

「切札さん、ここは一体…」

「先輩、アタシが今から言つ事全部信じてくれますか？」

「な、何よ。いきなり…」

かつみは紫保の力を借りるために、この空間が『魔女』と呼ばれる存在によって生み出されたものだと説明した。

以前キユウベえが、かつみと梓芦に説明したことをそつくりそのまま言つたのだ。

そして、その魔女を倒さなければこの結界からは抜け出せない。魔女を倒すために紫保の力を貸してほしい…とも

「…魔女ねえ」

そんな物信じられない、そう言つた表情をする紫保。確かに、いきなりそんなことを言われて信じると言つ方がどうかしている。

とその時…

「まざい！ヤツが来た！」

「ヤツ…」

「魔女です！あそこに隠れましょー！」

そうかつみが言つと、二人は本棚の影に隠れた。徐々に大きな足音のような轟音が近づいてくる。二人が恐る恐る物陰から魔女を覗く。その魔女は、全身を本や紙に纏つた巨大なゴーレムのような姿をしている。

10mは軽くあるだろう。しかも、以前の魔女と違いこちらは一足で立っている。その威圧感は以前の魔女の比ではない。感じたこともない恐怖を味わう一人。だが、幸いこちらには気づいていない。彼女たちの前を通り過ぎて行つた。

「あ、あんなのどうやって倒せばいいのよー。」

紫保が震えながら言った。

確かに見たところかなり強力な力を持った魔女のようだ。  
一対一で戦つたらかつみでも勝てないかも知れない。

いや、格闘勝負でも確実に負ける…

しかし、そこは頭脳でカバーするしかない。

二人は梓芦のように魔法は使えない。

つまり、魔法以外の力で倒すしかない！

「アタシが突っ込んでも勝てるかどうかは分からぬいし…」

「何か武器になるものは無いかしら?..」

そう言つて辺りを探す紫保とかつみ。

しかし、あるのは本と本棚、そしてそれを読むために置かれたであ  
ろうイスとテーブルのみ。

イスを壊せば武器にはなるかもしけないが、そのような物である魔  
女を倒せるとは思えない。

とりあえずそのイスに座り、作戦を練ることにした。  
しかし武器になる物も無ければ力でも勝てない…

万事休すだ。

「携帯は…繋がるわけないよなあ…」

かつみは梓芦に何とか連絡を取れないかと試みるが、もちろん圏外だった。

梓芦さえいればどうにかなったのかもしれないが…  
紫保も携帯を取り出そうと自分のカバンを手に取る。  
だが、なかなか見つからない。

中に入っている物を全てかき出し、ようやく見つけることが出来た。

「私もだめね…」

二人の携帯に表示される圏外の文字。  
しかしその時、かつみには別の物が眼に入っていた。  
それは…

「あの、不動先輩これは…」

かつみが取り出したのは、紫保の荷物の中に入っていた安物のマッチだった。

よくフアリレスなどで無料で配られているタイプだ。

「それ？不良のクズが持っていたヤツを押収したのよ」

「これ、使えますよーー！」

先ほどの魔女は体中に羊皮紙を纏っていた。  
羊皮紙は通常の新品の紙よりも燃えやすい。  
このマッチで魔女の身体に火を付ければ…

「でも、そんな物で火をつけるって言つてもかなり近づかないといけないし、第一自分だって巻き添えを喰らってしまうわ」

確かにそうだ。

マッチの長さは精々三〇cm程度。

こんなもので魔女に火を付けようとしたらかなり近くまで行かないといけない。

あんな化物に掴まつたら一巻の終わりだ。

「へへへーーそれだつてちゃんと考へていまますよー。」

そう言いつと、かつみは自身のカバンからあるものを取り出した。それは、塗装用の赤色のカラースプレーだった。

「しろの奴が部活で使つて言つてたから家にあつたのを持つてきました」

「ラッカースプレー…あなたまさか！？」

「コイツを導火線の代わりに使います！」

かつみのラッカースプレーには非常に強い可燃性の薬品『トルエン』が含まれている。

これを地面に散布し、そこに魔女を誘い込もうというのだ。  
導火線と化したラッカースプレーの上を魔女が通つた瞬間に着火するという寸法だ。

「アタシが囮になりますから、不動先輩はコイツで導火線を書いて

ください！」

「わかったわ！」

かつみからラッカースプレーを受け取ると、誘導する先にラッカースプレーで地面に塗料を吹き付ける紫保。一方、かつみは魔女の前に出て誘導始めた。

「うわちうわちーーー！」

それを見た魔女は怒り狂いかつみを追いかけまわす。だが、その速度ではかつみに追いつけない。魔女を適当にあしらいながらうまく誘導していく。しかし…

「うわーーー！」

ラッカースプレーが使いかけの物だったため、中の塗料が途中で切れてしまったのだ。紫保はなんとかして塗料を吹き付けようとするがうまくいかない。

ほんの少しだけなら出るのだが、その程度では導火線の代わりにはならない。

やがて、かつみと魔女の足音がしてくる。

このままでは魔女を倒せない！

「（どうする……？）」

と、その時紫保はあることを思いついた。

それと同時に、先ほど座っていたイスを壁に叩きつけてバラバラに破壊する。

木製の古びたイスだつたため簡単に壊すことが出来た。

そして、その破片の中で一番長い棒の先端にありつたけの塗料をかける。

殆どなかつたが、先端の十センチほどを赤くすることは出来た。

そしてその部分に本棚の本を破つた紙を張り付けていく。

塗料には若干の粘着性がある。

この塗料で紙を張り付け、いつたい何をしようといふのか？

「せ、せんぱーい！魔女が来ました！！」

その声と共に、ゴーレムのような姿をした魔女がかつみの後ろからついてくるのが見えた。

それを確認すると、紫保は手に持った紙を張り付けた棒に火をつけた！！

導火線が作れなくなつた今、彼女が作ったのは…松明。

「不動先輩！それは！？」

「はあああ…たあ…！」

「松明！？…行つけえ！！燃えろおおおおおーーー！」

かつみが自身の横を通過したと同時にその松明を魔女に投げつけた！  
体の紙と本に引火し、全身が炎に包まれる魔女。

やがてその炎は周りの本や本棚にまで燃え移り始める。

「や、やばいよこれ！」

その光景を見て思わずかつみが叫ぶ。

火に包まれた魔女は完全に沈黙したが、結界は既に火に包まれている。

だが、魔女を倒したことで結界が端の方から徐々に消えていく。

そしてそこから外の景色が見えた。

自分たちの逃げ場が無くなる前に、二人はなんとかそこに飛び込んだ。

「や、やったわ…」

「魔女を…倒した！…」

夜の公園で思わず抱き合つ一人。  
自力で魔女を倒したこと、そして見事生還できたことが嬉しかった  
のだ。  
と、そこにキュウベえに導かれて魔女を退治しに来た梓芦がやつて  
來た。

「あれ、かつみさんと紫保さん…？」

「や、やつたぜアタシ達…」

「魔女を…倒したわ…」

「え、ええ…！…本當ですか…？」

「ああ…！」

「け、怪我とかはありませんか？」

「アタシは無いけど…」

そう言ひて紫保の方を見るかつみ。

紫保は先ほど松明を投げたときにその燃えカスが右手に当たってしまつたのだ。

軽いやけどだが、早く手当をしなければ…

「私に任せてくれさい…」

そつ言ひて紫保の手に自身の手をかざす梓芦。すると、徐々に紫保のやけどが治つていった。梓芦は治癒の願いで魔法少女となつた。

そのため、こいつた治療の魔法が得意なのだ。

直接の戦闘は苦手だが、サポートなどに特化している…

そつ言ひたタイプなのだ。

「すい…やけどが一瞬で…」

「これが私の魔法です」

「魔法…？」

「まあまあ、それは後でゆっくり話しますから

「当然よ」

「なあしろ、アタシ達がどうやって魔女を倒したか聞きたくないか、  
それは…」

梓芦に、長々と先ほどの戦いの経緯を話すかつみ。  
それを見ながらキュウベえは一人思つた。

魔法少女以外でも魔女を倒せるものがいるのか…

と。

## 第五話 燃えりゆるおおおおおーーー（後書き）

攻撃時に叫ぶのが好きなのか、かつみは…

## 第六話 叶えられる願いを1000個にして（前書き）

今回新キャラ登場です。

## 第六話 叶えられる願いを1000個にして

魔女、そして魔法少女…

あの戦いの翌日、紫保は改めてかつみ達にそれらが何であるかの説明を求めた。

少なくとも、あの化物がこの世の摂理に従つた生き物ではないことはわかる。

以前と同じく、昼休みに食堂で話すことにした三人。

四人用のテーブルに紫保に向かう形で座る梓芦とかつみ。

「…で、改めて聞くわ。遊城さんの言っていた魔法って何？」

梓芦に目線を向ける紫保。

昨日の梓芦の使った力…

火傷を一瞬にして直したあの力は確かに魔法としか言ひようがない能力だ。

それはそう言った力の総称なのか？

それとも、本当に魔法が存在するとでもいうのか？

「魔法っていうのは…」

魔法について説明をしようとする梓芦。だが、思わず言葉に詰まってしまう。

しかし何を話せばいいのか？

自分だつてまだ魔法の全容を知ったわけでは無い。あの治療魔法だつてキュウベえに教えてもらえたまでは知らなかつたのだ。

戸惑う梓芦の前に現れたのは…

『それはぼくが説明した方がいいかな？』

彼女たちの前にキュウベえが現れる。

いつもはかつみと梓芦等と言つた魔法少女とその関係のある人物にしか姿を見せないようにしているキュウベえ。

だが、今回は特別だ。

紫保ももしかしたら契約してくれるかもしないし、ここでもう一度かつみと梓芦に説明しておいた方が何かと便利だと思つたからだ。

：一通りの説明が終わり改めてキュウベえの方を見る紫保。触つてみた。

普通の動物のような感じがした。

昨日の戦い、そして今日の前にいるキュウベえ…

しかし、全てを信じると言う方が無理がある。

現実主義者の紫保ならなおさらだ。

だが、やはり信じるしかない。

それでもなければ昨日のことは説明がつかない。

紫保は今のキユウベえの説明を全て信じることにした。

『どう？ 君も魔法少女になるかい？』

そう言われ、しばし考え込む紫保。

願いがかなうといつのも梓芦の話を聞くに本当のようだ。  
しかし、いま自分に叶えたい願いなどあるのか？  
確かににあるにはある。

だが、それはかつみを生徒会に入れたいなどと言った努力すれば叶えられそうな願いばかり。

命を懸けてまで叶える価値のある物ではない。  
漫画などに出てくる『不老不死』や『世界征服』と言つたものなど  
に興味もない。

魔法少女になるといつのは以外と難しいものだ。

… そう思う紫保。

「そこまでして叶えたい願いも無いわね

今無理に契約して後に未練が残つても困る。

紫保もかつみと同じく魔法少女になることはやめた。

「そ、う…」

残念そうな顔をしながらその場を去ろうとするキュウベえ。

「かつみちやーん！」

かつみの座っていた席の後ろから一人の少女が飛び出してきた！

「あ、ゆー！」

「ちよつと、最近付けて黙かれるよ~」

「せせせ、じゆんじゆん」

その言いながらかつみをポンポンと呴くやーーー」と呼ばれた少女。

彼女の本名は風間遊子。

隣のクラスのかつみの友人だ。

最近は魔女などと戦つていたりしたため梓芦の方の付き合いを優先していたのだった。

「みんなで何の話してたの〜？」

「えーと、ああちょっとな……」

さすがにそのまま魔女退治などといつわけにもいかず適当に話を誤魔化すかつみ。

紫保とは違い、遊子はそこまではいついへはないので簡単に誤魔化すことが出来た。

持つてたジュースを飲みながら遊子が言つた。

「そつ きから 気になつてたんだけど、そじこある由こねいぐるみは  
なに?」

キュウベえの方を指さしながら言つ遊子。

今、キュウベえはかつみ、梓芦、紫保にしか見えないはずだ。  
何故、彼女にキュウベえの姿が見えるのか…?

「 もーーー……お前、 こいつが見えるのか? 」

「 当たり前だよ~、 田の前にあるの? 」

そつ間にながらキョウベえをぱしまして呪へ遊子。  
どうやら本当に見えっこねえんだ。

『 やめてよ、 ほぐだつて痛いんだから』

「 しゃべったー? 」

今までぬごぐるみだと思っていたキョウベえが突然しゃべりだし、  
驚く遊子。

そして一人のやり取りを横田で見ながら考えるかつみ。  
と、 ここにあることを思い出した。

遊子の家は確か先祖代々『 神社』 だったことを。  
わざに、 霊感も一族の中で最も強こと昔遊子の父から聞いたことが  
ある。

「 ( もうしたんですか? かつみさん? ) 」

「 もうしたんですか? かつみさん? 」

「いや、なんでも…」

梓芦が心配して声をかけてくれたが、今は遊子の方が<sup>気になる。</sup>遊子は少々天然<sup>バカ</sup>な所が昔からあることをかつみは知っている。もしキュウベえから『魔法少女にならないか』と言われたらどんなに嬉しいで契約してしまうかもしれない。

後で後悔の無い願いをした方がいいと思っているかつみはすぐさまキュウベえと話している遊小の方を見た。

『魔法少女になつてよー』

やはり遊子を誘つているキュウベえ。  
しかし一方の遊子はどうつと…

「じゃあ、あたしが叶えられる願いを1000個にしてー。」

かなり滅茶苦茶のことと言つてこる。

『それは無理だよ』

「なんで？」

『アーツの力なのだから』

「じゃあ契約しないー」

「どうやら彼女も契約はしないようだ。  
少なくともかつみの心配していた通りにはならなかつたようだ。」

「でも、魔女や魔法少女って見てみたいなー」

『でしょーーそれなら契約をーー』

「それはいーよ」

『え』

「かつみちゃんや梓苅ちゃんみたいには戦えないけど、あたしにも  
何か出来ることがないかな？手伝いたいよ！」

キュウべえの話を聞いてそちらの方面に興味を持つてしまった遊子。  
そして紫保も…

「それなら、私も協力してあげるわ。一般生徒が死なれでもしたら  
生徒会としてもいろいろと困るしね」

何やら妙な方向に話がまとまって来た一行。

魔法少女の梓芦。

格闘少女のかつみ。

そして一般人の紫保と遊子。

この四人による対魔女戦線が完成した！

## 第七話 謎の美少女転校生（前書き）

今回から新章突入です。

かなり間が開いてしまったのは

- ・『救世のティマー』がちょうど最終話近くだったから
- ・それでモチベーション全てを使い果たしてしまったから
- …と言う情けない理由です。

章のタイトルでおおよその内容がばれてしまつかもしけませんが、そこは許してください。

## 第七話 謎の美少女転校生

この見滝原を守るため、対魔女チームを結成したかつみ達。放課後の空いた時間をメインに魔女を狩るのが主な活動だ。

梓芦の力で魔女を探し、それをかつみ達が叩く。

（梓芦の魔法は攻撃メインではないため、かつみが攻撃を担当する）  
今日も魔女を見つけ、その結界内で戦っていた…

「とつやーーー！」

かつみの蹴りが透明なビンのような姿をした魔女の横腹（？）に当たる。

どうやらそこが急所だったようだ。

魔女はあっという間にバラバラに砕け散った。

「よしー今日もいい感じー！」

魔女の亡骸からグリーフシードを取り出しそれを梓芦に渡すかつみ。  
戦いの成果としては上々だ。  
しかし…

「いいかんじじゃないわよ！」

「もうだよー！」

「なんでだー!?」

「ちやんと勝ちましたよ

」「私達が全然活躍してないじゃない！」「…」

そう言つたのは紫保と遊子。

実はこの戦いで活躍したのはかつみと梓芦だけであり、この二人は後の方で使い魔を少し潰していくくらいだった。

紫保の持つてきた物は木刀。

遊子が持つてきたのは…よくわからないお札のようなモノだ。

「あの……といひでそのお札みたいなのは？」

遊子に紫保が訊ねる。

和紙に筆で書かれた怪しげな文字。  
しかも見る限りでは、よく売られている印刷の物では無い。  
筆と墨で書かれた手書きのようだ。

「これ？パパの作ったお札を何枚か家から持つてきたの」

遊子の父はかなり腕の立つ靈媒師らしく、日本中から除霊の依頼が  
後を絶たないらしい。

そのため、滅多に家には帰らず日本中を飛び回っている。  
家には父の作ったお札が何枚か保存してあるためそれを持つてきた  
らしい。

ちなみに、そんな事情と将来のこともあって今は遊子が神社の管理  
と仮神主をやっている。

「除霊って……」

「魔女は靈じやないと想ひや…」

「でもこれ振り回してゐ間は使い魔も寄つてこなかつたよ

呆れる紫保とかつみ。

まあ、お札に多少効果があるだけでも良しとしよう。

紫保と遊子…

この一人は魔法少女でもないし、特に格闘センスが良いわけでもない。

『戦いについていけない』のだ。

だからといってせつかく一緒に戦つてくれると叫びてくれたのだ。

その善意を無駄にしたくは無い。

もしどちらかが負傷した場合、最悪一人で戦わなければならなくな  
つてしまつ。

「（魔法少女の仲間を探して…作戦を練る必要があるかもな…）」

魔法少女の仲間…

誰かを新たにキュウベえと契約刺せるのは難しいだろう。

既に魔法少女となつてゐる者を探せばいいのだが、そう簡単に見つ  
かるわけもない。

だが、戦力の拡大が必要なのも事実。  
もつと仲間を増やす必要があるだらう。

「でも、そう簡単に見つかるわけないよなあ…」

翌日、教室で思つかつみ。

以前かつみと体育の試合でケガを負つた仁美も退院し、教室にいる。

「以前は悪かつたな」

「いいえ、もう済んだことですから」

軽く挨拶すると自分の席に座り、うつ伏せになる。

ここにいる全員が、きっと魔法少女も、魔女も知らないのだらう。魔女と戦う魔法少女。

さしづめ人知れず悪と戦う正義のヒーローと言つたところか…

「（まるでアメコミのバットマンだな。…て言つても、アタシは魔法少女じゃないけど…）」

幾らヒーローとはいっても全てが完璧なわけでは無い。ヒーローにはヒーローの悩みという物がある。

それは本家ヒーロー達と何ら変わりないが…

そういう思つている内に、担任の早乙女先生が教室に入つて来た。朝のホームルームが始まり、

「今日はみなさんに大事なお話があります。心して聞くよ！」

「（大切な話…？なんだよ一体？）」

どうせこうした話など生徒からしたら対して大事な物ではないこ

とが多い。

この先生の場合は特にそれが多い。

自分が男にフラれた話などどうでもいいだろ？…

今回もそんな感じの話だと思つたが…

「はい、それでは今田はみなさんに転校生を紹介します」

「（転校生…？）の時期に珍しいな」

普通、転校生なら大きな休みなど後に来るものだとばかり思つていたが…  
どんな奴かと気になり、机から顔を上げるかつみ。  
教室に入つて来たのは…

「暁美ほむらです。よろしくお願ひします」

教室に入つて来たのは、黒い長髪の、どこか落ち着いた雰囲気のする少女だった。  
ある意味ではかつみと正反対のタイプだ。  
紹介などを淡々と済ませると、自分の席に着く。

「（暁美ほむら…か）」

どこか普通の生徒とは違つ雰囲気を感じる。

ホームルームを済ませ授業が始まる。

後の授業の体育や数学でも、ほむらは抜群の好成績を見せた。

それにその容姿。

もう少し人に接する態度さえよければまさに完璧と言つていいだろう。

「（ま、アタシには関係ないか。しばらくは別のこととに専念したい  
しな）」

魔女との戦い、それに空手部の大会も今度に迫つている。  
ちょっと変わった雰囲気の転校生にかまつてゐる暇など無い。

それ有何故だかわからないが、妙にクラスと馴染んでゐる気がする  
し…

「（何かアイツと何度もあつてるような気がするんだよな…既視  
感でヤツか？）」

そう思いながら、一日の過程を終わらせ、部室へ急ぐかつみ。  
なぜかは分からぬが、ほむらが転校してくるシーンを見たとき激  
しい既視感を感じた。

何度もこのシーンを見た…ような。  
そんな感じが。

「あ、気のせいだな」

やつて教室を出ようとしたその時…

「ちょっとこいかしら…？」

「へ？…？」

かつみを呼び止めるほむら。

いきなり話しかけられて少し驚くかつみだが、不思議と『初めて話をする』と言ひような感じはしなかつた。

「あなた… 最近何か変わったこととかない？」

「変わったこと?」

変わったことならいくらでもあった。

魔女やキコウべえとの出会い、そして戦い。

いつものチンピリ相手との喧嘩の日々からすれば随分変わったといえる。

だがそんなこと言えるわけがない。

魔法関係のことは出来るだけ内緒にしておいた方がいいからだ。

「い、いや。別に何もないぜ」

「アハ…」

そう言つと、ほむらは去つていった。  
意味深な言葉を残して。

「あまりこのことには深くかかわらない方がいいわ。全てを失いたく  
ないのなら…」

かつみがこの言葉の意味を知るのは、もっと後のことだった…

## 第七話 謎の美少女転校生（後書き）

剣竜「ぬわああああああん（久しぶりのかつマギ投稿）疲れたあ  
もつーーー！」

かつみ「ちかれた」（小声）

剣竜「風呂入つてさつぱりしましょいつよ」

かつみ「は？（威圧）」

## 第八話 噂の魔法少女！？（前書き）

特に書くことないな  
皆さんは何か質問とかないですかね…？（疑問）

第八話 嘩の魔法少女！？

魔女結界内に響く悲鳴。

魔法少女と魔女の戦いの最中、『奴』は現れた。

眼にもとめらぬ畢業。

血をふき出し、その場に倒れる魔法少女。

それからしてしばらくだった。

魔力の激突を感じ取った梓芦がそこに倒れている魔法少女を見つけたのは…

裏路地に広がる血飛沫と、ボロボロになつた一人の少女の身体。

急いで少女のそばへと駆け寄る梓芦。

年は梓芦と同じくらいか少し上のようだ。

幸いにも、倒れていた魔法少女はまだ息があった。

梓芦は自身の魔力を使い、倒れていた少女の体を治した。まるで布切れのように引き去っていた皮膚、？き斬られていた喉笛、

その全てが何とか元通りになつた。

「へ、ひ、」

「よかつた…気づきましたか？」

梓芦が少女に声をかけた。

「…貴女は？」

「私は遊城梓芦。ゆうき しづあなたと同じ、魔法少女よ」

そう言つて自身のソウルジエムを見せる梓芦。

最初は警戒していた少女だったが、それを見て安心したのか、少しずつ話し始めた。

「…私は瀬道亜衣。ソウルジムは…」れ

亜衣がソウルジムを取り出した。

藍色に輝くそれはまるで透き通った深い湖の様だった。

「一体なんで倒れてたんですか？魔女と相打ちになつた…とか？」

梓芦の問いに、亜衣は先ほどの事を離し始めた。  
もともと亜衣はこの街を担当する魔法少女ではなく、少し離れた町  
の魔法少女らしい。  
だが、その町はあまり魔女が出なく時折グリーフシード不足に陥る  
ことがあつたという。  
そこで、魔女が多く出るところの見滝原で魔女を狩つていたらし  
い。

…この街を担当する魔法少女に見つかならないよ。

「人の縄張りを勝手に荒らしたのは認めるけど、それでもここまで  
の傷を負わせられるとは思わなかつたわ…」

「どうしてですか？」

「私を襲ったのは……私達と同じ『魔法少女』だったの……」

亜衣を襲った犯人、それは彼女や梓芦と同じ『魔法少女』だった！？  
魔法少女が魔法少女を襲う…  
一体何故…

少し考える梓芦。

真っ先に考えられる理由としては、亜衣の持つグリーフシードを奪うためだろう。  
だが…

「私も最初はそれが目当てで襲ってきたかと思ったのだけれど、奴はグリーフシードは奪つて行かなかつた」  
「なんで…？」

「さあね。私はしばらく自分の町で魔女を狩ることに専念する。貴女も別の街に六場を見つけた方がいいわ」

そう言つと、亜衣は去つていった。  
平静を装つてはいたものの、亜衣の声はずつと震えていた…

この出来事の翌日、梓菜は放課後にかつみを食堂へと呼び出した。  
そして、この日の事を話した。

見滝原で魔法少女を襲う『魔法少女』がいるという事を…

「マジ…かよ

「確かに『魔法少女に襲われた』って言つてました」

「でも、襲われたヤツのグリーフシードは取られてないんだろう?」

「はい。グリーフシード狙いの可能性も最初は考えたんですが…

「じゃあなんで…」

目的の分からぬ『見えざる敵』。

何故魔法少女を狩るのか、その理由が分からない。

しかも相手の強さや姿などもわからない今、あまり立つことない。

「今迄みたいにアタシ達が魔女を狩つていると間違いなくそいつはアタシ達を狙つてくるだろ？」「

「たぶん…」

「アタシと梓芦はともかく、この事件に不動先輩とゆーには巻き込まない方がいいかもな」

魔法少女の梓芦と多くの修羅場を潜り抜けてきたかつみはともかく、紫保と遊子はあくまで一般人。

魔女のような正体のハツキリとした存在が相手ならともかく、相手の正体、目的その全てが分からぬ今回の事件にあの一人を巻き込むのは避けた方がいいだろう。

「何で魔法少女が同じ魔法少女を…？」

改めて考えるかつみ。

と、その時…

「魔法…少女？」

「かつみ…アンタ達、今何の話してたの？」

そこに現れたのは、かつみの同級生のまじかとセヤカ。

どうやら、今の話を聞いていたようだ。  
何処から聞かれていたかは分からぬが、ここは適当に誤魔化すしかない…！

「え、ええと…」、今度発売するゲームの話だよ！」

「そ、そういう…魔法使いが主役のゲームなんですね…」

「ふうん。なんだ、私達の勘違いだったみたい」

「話を邪魔してごめんね」

適当に誤魔化すことが出来たが、あまり話に熱中しそぎるとこの辺の  
も禁物だ。

今日の話はこれくらいにして、一人は解散することにした。  
かつみはこの後に空手部の部活動があるらしい、今日は梓芦一人で  
の下校だ。

美術部となると、他の運動系の部活よりもかなり早く帰ることが多  
くなるため、あまり友人とは一緒に下校しないようだ。  
それ以外にも、梓芦が一人で下校する理由がある。  
それは…魔女退治！

「（魔法少女狩りの魔法少女…確かに怖いけれど、だからと言つて  
魔女を放つておく訳にもいかないわ…）」「

早速近くの公園にそれらしい魔力を感じた梓芦。

案の定、公園には魔女の使い魔が小さな結界を作っていた。

だが、肝心の魔女がない。

どうやら、魔女となる前の使い魔のみが結界を張つてゐるようだ。

「使い魔だけ…でも、こいつは倒さないとね」

使い魔と言つても成長すれば立派な魔女となる。

そうなれば多くの人間に危害を与えてしまう。

それを防ぐためにも、まだ弱いうちに叩いておく。

グリーフシードは手に入らないが、魔女による被害は確実に減らすことが出来る。

「…よし…」

結界に飛び込むと同時に魔法少女姿へと変わり、使い魔へ攻撃を仕掛けた。

小さな蜘蛛のような姿をした使い魔に一発一発確実に攻撃を加える。元々直接の戦闘には向かない梓芦の魔法だが、さすがに使い魔相手に苦戦するほど貧弱では無い。

大きな絵筆で使い魔を殴り飛ばし、壁に叩きつける。敵の動きも止まり、あと一発…

「これでアドメよー」

大きな絵筆を巨大『ザインナイフ』へと変え、それで使い魔を貫く！  
…はずだった。  
だが…

力アン！

辺りに高い金属音が響く。

梓芦のナイフが何かにはじかれたのだ。  
地面に突き刺さる梓芦のナイフ。

その隙に使い魔は逃げてしまった。

公園に張られていた結界は消滅し、辺りはいつもの公園に戻つてい  
た。

「あ、逃げた！？」

使い魔を追掛けようとする梓芦。  
気配をたどつていけばまだ間に合つ。  
だが、その前に一人の少女が立ちはだかつた…！  
敵意をむき出しにした鋭い眼光を持つ少女。  
梓芦や亜衣と同じ『魔法少女』が…



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5697w/>

---

格闘少女かつみ マギカ

2011年12月2日02時56分発行